[論説]

会津の漆文化考

井波　純

2010 年 7 月

日本文化財漆協会　会報 119 号

会津漆器の持たれている印象や、その要因について歴史的な背景から考察するとともに今後の可能性について述べた。漆器を地場産業とする会津漆器には、輪島塗などの高級化された他産地品に比べ廉価な印象が強く持たれているが、それは決して当初からそういったものを生産する目的を持っていたのではなく、江戸期から会津若松をめぐる数々の出来事やその中での職人たちの努力により、会津特有の技法を編み出してきた事と深い関連性がある。藩政の中で大衆漆器として関西を中心に販路を拡大するため、材料にかかる費用を極力掛けず、その分他の産地には真似の出来ない技法により会津漆器としての差別化を図る事が出来た為、産地の規模としては大きなものとなった。戊辰戦争の荒廃からもいち早く産地として再興し、明治期以降も帝室技芸員に師事するなど先進性を持った考えの名工も生み出したが、戦後の経済復興や高度成長期に利益のみを重要視する形が全国的に主流となった際、大量生産のみに頼った面もあり、それ以降の印象として会津漆器の印象を語られるといった経緯がある。現代においては、実のところ会津の工人の技量は、それぞれの努力により、輪島や金沢、京都などといった他産地との差異はほとんどなく、むしろ確かな仕事を適価で請負い、新しい表現技法に強い興味を示す者も多い。こういった点から販売形態が問屋中心の大量生産型から作り手中心の個人生産型に移行しつつある現在では、オリジナル性をもった提案で活躍する漆工家も少なからず現れている。全国的な業界不振はいずれの地域でも淘汰される部分はあり会津漆器もその例外ではないが、再び工人達の奮闘により新しい方向に向かっているようにも感じられる。この秋に開催される「会津・漆の芸術祭」においても現代美術家と漆職人のコラボレーション作品、現在の会津漆芸家の作品展示を行う。また、漆という素材を身近に感じてもらうための様々なワークショップや漆以外の伝統的工芸品と漆造形作家とのコラボレーション等も企画されている。漆の新しい可能性を広く見せられる地域として、これまで会津で育まれた「伝統技法に対し柔軟性を持ちながら継承し、新たな領域を拓く」という面を通し、いまだ多くの人が持っている(漆＝扱いの難しい高級品)という固定概念を外す事も含め、漆の未来において更に広がりを持たせる場としての可能性も感じられる。

[展覧会]

井波　純・吾子可苗　漆芸展

井波　純

2010 年 1 月 28 日～2 月 6 日

ギャラリー愚怜

東京都文京区

東京都文京区にあるギャラリー愚怜にて、本学非常勤吾子可苗講師と 2 人展を開催。現代の生活空間を創造する漆芸作品の提案。漆の持つ特性と表現力を生かした展示を行う。

[公募展]

第 49 回日本クラフト展

井波 純

2010 年 3 月 6 日～3 月 14 日

主催 社団法人日本クラフトデザイン協会

会場 丸ビルホール（東京都）

第 49 回日本クラフト展において、応募作品「suji suji 」入選。この作品は、陶芸のような風合いを持ちながら漆器の持つ軽さや肌触りにぬくもりが感じられるような表現を研究する目的として制作した。通常の漆下地を回転式の轆轤機にかけ直に指で何層にも付け、その痕跡を無くさないよう、かつ、触れ心地の柔らかさを大切に研ぎ上げ、朱漆や生漆を何層にも摺りつけて仕上げるという技法とした。展示会場では、陶芸作品だと思いながら触れてみると意外な軽さや手になじみやすい肌合いから、技法に関する質問を受ける事もあった。

[展覧会]

第 64 回福島県総合美術展覧会　「Core」

井波　純

2010 年 6 月 18 日～6 月 27 日

主催　福島県、福島県教育員会ほか

会場　福島県文化センター（福島市）

第 64 回福島県総合美術展覧会において、美術工芸部門招待作家として漆芸造形作品「Core」を展示した。

[展覧会]

会津・漆の芸術祭　「Stupa」

井波　純

2010年10月2日〜11月23日

主催　福島県、福島県立博物館

　　「会津・漆の芸術祭」実行委員会

会場　会津若松市、喜多方市、三島町、昭和村

福島県立博物館が主体となり、会津若松市、喜多方市内を活用した漆の芸術祭を開催。この展示は協力の申し出があった商店街や造り酒屋などのスペースを活用し、街なかでの漆作品を展示するという企画のもと開催された。期間中、数々のイベントやワークショップも行われ、これまでの美術工芸展とは一線を画する展覧会となった。この作品は、作者がこれまでに行ったアジアを中心とした漆文化の源流調査において、大きく感銘を受けた仏教世界と漆文化との繋がりに関わりを持った表現としている。アジア各地で見かけたストゥーパ(仏舎利塔）は天高くそびえ、釈迦への尊厳と慈悲の願いにその存在感を大きく示す。それは人々の希望の象徴とも感じられた。轆轤造形に無限大の永続性を感じその均等な造形の限界性を追求しながら、今回の芸術祭に漆の未来への永遠性も願い 3 メートル 20 センチの高さを持つ漆造形作品を制作した。作品は、会津の老舗酒造蔵元である末廣酒造嘉永蔵の神を祀る大きな神棚のある空間に展示され、あたかもかつての信仰である「神仏習合」を感じさせる展示となり、それはアジアの中の日本という国での仏教の捉え方とも合致する展示空間となった。

[展覧会]

会津・漆の芸術祭　「金彩朱磨会津桐文 SL ヘッドマーク」

井波　純

2010 年 10 月 30 日〜11 月 23 日

主催　福島県、福島県立博物館

　　「会津・漆の芸術祭」実行委員会

JR 東日本「SL 会津只見号」

「会津・漆の芸術祭」に於いて、JR 東日本の協力を依頼し、会期中にイベント列車として走行する C11「会津只見紅葉号」に合わせ、SL の先端部に装着するヘッドマークを漆にて会津独自の装飾技法である朱磨きの技術を用いて行ってはどうかと提案し、デザインと制作を行った。採寸からプレートの制作、福島県ハイテクプラザとの協議の上で県有特許でもある、紫外線硬化型の漆塗料や酵素重合過程を大幅に短縮した速乾性の漆塗料などの活用も視野に入れ制作した。デザインは、走行する只見線沿線が会津桐の産地でもある事から、会津桐をモチーフとした華丸型とし、運行区間の 28 駅のうち、文字で会津若松駅と、只見駅を示し、間の 26 駅を葉の枚数で表現するものとした。JR 側に使用材料の熱変化試験による耐熱性のデータ提出など事前の許可申請に手間取ったが、材料使用許可を得る事が出来たため、今後は同じ仕様のものを再び提案できる事にもつながった。

[展覧会]

会津・漆の芸術祭　「会津短大プロジェクト」

井波　純

2010 年 10 月 2 日～11 月 23 日

主催　福島県、福島県立博物館

　　「会津・漆の芸術祭」実行委員会

野口英世青春通り BUS CAFÉ

七日町　横田新　夢の蔵

「会津・漆の芸術祭」では、実行委員の一員として、展示作家の選定において全国の漆を用いて表現する造形作家への協力要請や各イベントの調整に対し意見を述べさせていただいた。本学の参加においても会津短大プロジェクトとして、主催者に向け本学非常勤吾子可苗講師の協力のもと 2 つの提案を行った。ひとつは『クラシックバスを漆絵で飾ろう』というもの。もうひとつは『うるしころ』である。『クラシックバスを漆絵で飾ろう』はバス所有者の広田タクシーに御協力頂き、野口英世通りにオープンした BUS CAFÉ に展示してあるクラシックバスに漆で装飾しようというもので、デザインのアイデアをデザイン学生向けに公募形式にて依頼し、主催者の審査会で選出されたデザインを会津で 46 年の歴史を持つ工芸会の会津工芸新生会との協力で制作していくというものである。一方の『うるしころ』はハイテクプラザで開発され特許でもある「漆粘土」をより身近に感じてもらうため、石ころのように丸め漆を刷り込んだだけの無彩色のモノを学生とともに 500 個以上制作し、ワークショップ形式でキラキラなパーツを貼り、絵具で自由に描いて、一人ひとりの宝石のような石ころならぬ「うるしころ」を制作し、会期中に展示会場がどんどん華やかに変化していくという企画である。ともに、大変好評で、ボンネットバスは、次点作品も喜多方アートぶらりで運行された無料シャトルバスのラッピングデザインとして 4 日間の運行期間中走行し、約 500 名の乗客の目に触れ、BUS CAFÉ　に展示された漆絵のバスも訪れた人の好評を博した。うるしころに関しては会津短大紅翔祭でのワークショップを皮切りに、展示会場で 4 回行い、会場でテレビ取材を受ける事や、その軽さに驚いた大人も夢中になるなど好評であった。最後には若松市内の幼稚園から全園児約 140 名の参加依頼もあり、うるしころの全装飾を成功させる事が出来た。完成した『うるしころ』は希望者には会期終了後、福島県立博物館にて配付された。

BUS CAFÉ に展示された漆絵仕様のバス

デザイン採用のラッピング仕様のバス

幼稚園でのワークショップの様子

完成した『うるしころ』たち